

四月総評 立花開

アイライン長し白鳥眠るに似て

長谷川絃香

宮城県

アイラインを引くとき、不自然にはならないけれど綺麗に見えるぎりぎりの長さを攻めたい。その長さはルツキズムに囚われている長さともいえるかもしだれないと。メイクは鎧にも翼になるものだが、“眠る白鳥”の羽根の艶を纏う意識は作者にどんな作用をもたらすのだろうか。

たんぽぽの

となりもたんぽぽ

ぽぽぽぽ

桜咲

千葉県

たんぽぽの隣りの、そのまた隣りもきつとたんぽぽ。「ぼ」のリフレインに、視線が触れたところからたんぽぽが芽吹き花開くような華やかさを感じる。季節は自然と移り替わっていくけれど、“見る”ことで深まる春がある。すべて平仮名なのも柔らかい。

枇杷を食う、

孫を笑わせられなくて

松下

誠一 東京都

自分でなければ孫を笑わせられたかもしれない。自分だから、求められたものを返すことできなかつた。直視できないものから目をそらすため、一心不乱に枇杷を貪る。その肩に抱えきれない悔いと羞恥がのしかかっている。

咎ひとつ懺悔もひとつ蝮草

小林紅石 埼玉県

生きれば生きる程、「咎」も「懺悔」も数えきれないほど増えていく。それぞれがたつたひとつひとつな訳がないのだけれど、あまりに大きな咎、大きな懺悔があるとその他は埋め尽くされてしまう。埋めたたくさんの咎と懺悔こそ向き合わなければいけないのに。

過去形で鬱を笑つて毛虫焼く

李いう子 佐賀県

「毛虫」が生きていても死んでいてもこの作品の暗さは深い。きっと作者の「鬱」は過去形ではないから。「毛虫」は自身の感情のメタファーでもあり、鬱になるに至った要因への怒りでもあるのだろう。周りにも自身にも燃やさずにはいられない感情がある。

北斎忌そのブルーから夏嵐

(嘉永2年4月18日没)

田崎 森太 東京都

葛飾北斎といえば「北斎ブルー」が有名だが、その青色は彼の生き様も染めあげた。作品ではなく忌日から溢れる「ブルー」があり、そこから吹いてくる「夏嵐」を感じた。死後も褪せない北斎の青への熱が、作者の心も染めていく。

夏が来て星に価値ある星に住む

有野 水都 東京都

「価値」という言葉のなんと傲慢なことだろう。見ていないだけで価値がないといい、見たい時に勝手に心を通わせる。いつだってそこにあるというのに。しかし私たちは夜空を見上げて星の美しさに慰められてしまう。価値を見出す私たちに住まれる星も、どこかの星に価値を押し付けられるのだ。

政治家になりたくてまず秘書になりそれから鞆屋になりました

貴田 雄介 熊本県

なりたいものになるための過程で、違うものが輝いて見えることはままある。「秘書」までは政治家へのレールに乗っていたけれど、何をきっかけに「鞆屋」になることを決めたのだろう。自分を語るために多弁である必要はない。「それから」の四文字に人生の面白さが詰まっている。

点Pの速度についてけなかつた妹

と道草をしている

うたた

岡山県

もし点Pに振り落とされたら、ずっと追いかけ続けるか諦めるしかない。「妹」は振り落とされたが、一緒に「道草」をしてくれる主体があり、そこを自分の点にした。何かに合わせた速度を続けることこそ、いつ足がもつれるか分からぬ。本当は振り落とされてから初めて問い合わせを知る。

彼のプレイリストは
たぶん生物じゃない、

代謝しないから。

水上

耀

長野県

「彼のプレイリスト」にはたくさんの想いが込められているのだろう。それこそ命を宿しそうな程に。決められた順に曲は巡り、新しく追加されることもない。「代謝」は「生物」の持つ特権である。想いは命に変換されることはない。